

教員の声

学校教育《改革・改善》の視点 1



2023年8～9月、青森県教育改革有識者会議は、青森県の小・中・高、特別支援学校に勤務する教員約1万1千人と保護者約2千人からアンケートを回収しました。しかし、分析は業者任せ、今年策定された「あおり未来教育ビジョン」「アクションプラン」に、現場の声は反映されていません。

青森県教組は、皆さんの生の声をもとに、県教委と交渉します！

学習指導要領の学習内容と標準時間の見直しが必要である。

国は特別活動の時間は設けられておらず、教科との連携を求めるものの、実際は無理やり授業時数としてカウントしている現状であるため、実際の時数は非常に多いものになっている。(中学校)

「授業時間数」

授業時数削減。全学年毎日5時間授業にする。削減した時間を、授業準備や会議、研修の時間に充てる。定時に退勤できるシステムを作るべき。(小学校)

多すぎる授業時数。毎日びっしり授業が入っていて余裕がありません。

授業が終わるとすぐに部活動です。何かあっても他の先生方に迷惑をかけるためなかなか休みも取れません。もっと余裕をもって授業を進めたいです。(中学校)

多すぎる仕事量。教科指導、学級担任、生徒指導、清掃指導、給食指導、巡回、部活動指導、分掌の担当、保護者への対応、不登校対応、PTAの役割、中体連での役割、各種研修など、とにかく仕事量が多いです。

加えて学習指導要領が改訂するたびに求められるものも多くなり、全てを丁寧に取り組むことは不可能です。(中学校)

7時間授業を規制するべきです。7時間授業は恒常的にサービス残業を生み出します。7時間授業がある限り、超過勤務時間が1時間増え、疲労が蓄積します。教員の労働環境の悪さは今や社会問題です。

今起こっている教員不足や質の低下は、行政や現場が労働環境改善を怠ってきたことが原因です。進学実績を出すために、少しでも授業時数を増やそうとした結果、現在の7時間授業になった訳ですが、標準の単位数を大幅に超えています。

県教委がイニシアチブを発揮して7時間授業を規制すべきです。本校では、放課後に「8校時」の進学講習が実施されていますが、「9校時」まで講習を実施している学校もあると聞きます。教員の労働安全衛生の面からも問題がありますが、生徒の精神衛生の面からも大きな問題があります。実態を調査した上で、規制をすべきです。(高等学校)

学校教育《改革・改善》の視点 **2**

教員の声

「学級定数

1クラス当たりの人数を減らすこと。40人では列の間を通るのもスムーズにいかないくらい混み合った環境で勉強している。50分で何人の生徒とコミュニケーションできるか想像してください。1人の先生とも話さずに1日が終わってしまう生徒もいるはずです。

それゆえ1人1人に目を届かせろといっても本当にできているのか現実的に疑問です。最近では生徒数減で空き教室が増えている。1クラスの人数を減らして学級数を維持し、教員数を確保してほしい。(中学校)

担任一人で30人以上を1学級で授業をするのは大変である。1学級の児童の人数を30人以下にする。手にかかる児童が非常に増えているため、手厚く目をかけるためには一クラスの児童数が多すぎるとともに、特別支援にあたる教員数が少なすぎる。1学級の子どもの人数、少なくとも30人以下にするべき。できれば25人以下。(小学校)

学級の児童数・・・40人学級は
どうなのだろう。学習をする上で
も子どもとの意思疎通を図る上で
も40人は多すぎる。
子どもたちをしっかりと把握する
ためにも学級の児童数20人に減ら
してほしい。そうすることで学級
担任の負担が減る。(小学校)



特別支援学級の1クラスには、最大8名在籍できるのだが、複数年の複数人数が在籍する学級では、単式学年の学級と比べて、支援できる量に大きな違いがある。
特別支援学校では1クラス6名が最大であり、そこに教員が2名つく。最低、その基準までの特別支援学級への支援拡大が必要であり、法改正が望めないのであれば、自治体で対応できるようにすべきである。(中学校)

できるだけ一人一人を見取りたいと思うが、教室は狭く、発言回数も限られ、ノートやワークシートを授業中に全員見ることはできない。多様なニーズを抱える子が多いので、県独自の予算で、教員を増やして人数が多い学級は、分けて少人数学級にするべき。(中学校)

青森県教職員組合

青森市橋本1-2-25 県教育会館内

TEL 017-734-7279 FAX 017-777-1440

E-mail aomoritu@iaa.itkeeper.ne.jp HP→



学校教育《改革・改善》の視点

教員の声

県の「あおり未来教育ビジョン」には「学校現場の様々な状況を一層丁寧に把握していくことが必要」、県教委の「アクションプラン」には「こどもの幸せのために教育に専念して働ける環境づくり」と書かれています。具体的な施策を実行させるために、さらに現場の声を届けなくてははいけません。県教組に、皆さんの声をお寄せください。

文部科学省が奨励している深い学びをやっていきますが、このままやっていくと教科書が終われない。考えて解決していくのに重点を置くのであれば、教科書の量を減らすべきだ。(小学校)



「授業内容」

多少の効率化では解決できないほど、学校での指導内容が多すぎるのではないかと思います。

自分が教員となった約40年前と比べると、英語指導、環境学習、情報教育(活用の仕方、マナー、危険、関わり方)、人権学習、命の学習(生命誕生)等々、今日的な課題としてどんどん指導内容は増えるばかりです。

子供に指導するには教材研究も必要です。教員を増やすためには、給与を上げるだけでなく、教員の仕事の量や負担を軽減し、教員の笑顔が増えることが大切だと思います。

(小学校)

特別支援学校では、一人一人に応じた指導の工夫が大切で、市販の教材では不十分であることから、教員がーからプリントや教材を作ろうと頑張ることが間々ある。

研修とは別に、教材のアイデアを共有できる仕組みづくりが不可欠である。(特別支援学校)

教育委員会からも管理職からも「学力向上」を目指して指導するように言われるが、それは県や国の学習状況調査、模擬テスト、高校入試得点で高得点を目指すことを指しており、暗記をさせたり、ドリル等を反復練習させたりしなければならない。(中学校)

教員の最大の仕事は「授業」だと考えていますが、いろいろな対応に追われ、放課後は部活指導などがあり、じつくりと「教材研究」できる時間が勤務時間内に取れません。熱心な教員は自分の時間を犠牲にして(残業したり、休みの日に行ったりして)それを行って行きます。しかし、そういった熱意がない教員は「とりあえず去年やった授業をそのままやればいい。」というスタンスで授業をしているようです。生徒の学力や、学ぶ姿勢そのものに悪影響をしていると思います。よって、勤務時間内にきちんと教材研究ができる勤務体制を目指した改革を希望します。(中学校)

学校教育《改革・改善》の視点 4

教員の声

勤務時間で帰ることができない雰囲気をつくりたい。現状では、管理職が遅くまで残っているため、他の教師が早く帰りにくい雰囲気となっている。

また、出勤時刻・退勤時刻を入力しているものの、残業の入力についてはほとんど入れている教師はなく、入れにくい状態。

他の教師に聞いても、ほぼ毎日、家や学校で残業している。(中学校)

学習指導要領で生徒に教えるべき内容が増大してきており、年間の授業時数内、教材研究で何とかクリアしようとしているが、教材研究に費やす時間が十分確保されていない状況である。

部活指導終了後、翌日の教材研究のために遅くまで居残る先生方が多い。ワークライフバランスのため、時間外勤務をできるだけ減らしたいと願うが、管理職として早めの帰宅を促す声がけもしにくい状況である。(中学校)

どんどん教科が増え、子どもたちも毎日4年生以上は6時間授業が当たり前になった。限られた時間の中で、増やすだけでなく精査していかないと、国語や算数などもっと丁寧に指導したい内容に十分時間が取れない。

教員も指導事項が多すぎて、授業準備や教材研究に時間が掛かり、残業も増えている。週5日のうち、6時間授業が3日、5時間授業は2日だが、会議や委員会活動があり、終業時刻までに仕事ができるのは30分程度。その日に終わらない仕事が積み重なっていく。

授業時数の削減が必要です。今のままでは、子どもたちが学校にいる時間が長く、校務の時間を確保できず、残業が当たり前になっています。(小学校)



管理職の意識改革が必要だと感じます。

数年前、タイムカードが導入された時、当時の校長から「時間外勤務が多すぎると校長の私が教育委員会から叱られる、時間管理のできていない教師のせいで、管理職が指導を受けなければならないんだ。」という趣旨の発言を受けました。

それでいて、業務内容を減らすわけでもなく、全く一般の職員の働き方を改善しようという意識は感じられませんでした。タイムカードの時間を改ざんすることも暗に言われました。一般職も管理職も、就業時間の1時間以上前に出勤し、夜9時、10時、11時とすごすのが当たり前、という感覚をとにかくなくしてほしいです。(中学校)

質問・意見・要望は
こちらへ→



青森県教職員組合

青森市橋本1-2-25 県教育会館内

TEL 017-734-7279 FAX 017-777-1440

E-mail aomoritu@iaa.itkeeper.ne.jp